

一般演題

1. Ascending diaschisis の一例

藤田 英明 矢戸 文男 菅野 巖
犬上 篤 日向野修一 田畑 賢一
上村 和夫 (秋田脳研・放)

左側小脳半球に出血性梗塞をきたした59歳女性、発症1か月および22か月後に ^{18}F -FDG と HEADTOME III (FWHM 8 mm) を用いて CMR-Glu を測定した。ポジトロン CT 像上に全脳で70か所に関心領域を設定し、各領域ごとに CMR-Glu の変化率(%)を算出した。左側小脳半球では、1回目に対し2回目は51%と CMR-Glu の著明な低下を認めた。一方、大脳半球では、右側 $110 \pm 10\%$ 、左側 $105 \pm 14\%$ と CMR-Glu の増加傾向を示した。しかし、右側 inferior frontal gyrus の円蓋部および右側 precentral gyrus, postcentral gyrus の外側領域では97%と減少傾向を認めた。このような現象は、一側の小脳半球の障害により tractus dentatothalamics および視床からの projection fiber 等を介する対側大脳皮質への遠位効果と考え“ascending diaschisis”と命名した。

2. ^{123}I -IMP 脳血流 SPECT によるパーキンソン病の検討

小田野幾雄 樋口 正一 木村 元政
酒井 邦夫 (新潟大・放)
石川 厚 (同・神内)

加療中のパーキンソン病20例を対象に、 ^{123}I -IMP 脳血流 SPECT を施行し、動脈採血法による脳血流量を測定した。その結果以下の事項が判明した。パーキンソン病の supratentorial CBF は全体に低下した(平均22%の低下)。特に前頭葉皮質の低下が著しい(平均29%の低下)。脳萎縮の程度と CBF の低下とはよく相関した。stage ならびに病期期間と基底核の CBF の低下には有意な相関がみられた。痴呆の程度(長谷川式スコア)と前頭葉皮質の CBF 低下、または頭頂葉皮質の CBF 低下との間には、有意な相関は得られず、パーキンソン病の痴呆は CBF 低下以外の原因によるものと推測された。

Alzheimer 病を合併したと思われる1症例があった。 ^{123}I -IMP による CBF 測定は、パーキンソン病の診断・経過観察に有用である。

3. 虚血性脳病変の脳血流と CO_2 反応性について ——Xe-133 吸入法 SPECT による評価——

駒谷 昭夫 山口 昂一 虻 眞弘
高梨 俊保 堤 玲子 (山形大・放)

X-CT 上明らかな LDA のない TIA, RIND 32 例の rCBF を Xe-133 吸入法 SPECT (HEADTOME SET021) にて測定した。同じ日に5% CO_2 混合空気による CO_2 負荷試験も行い、脳血流低下域と健側の CO_2 反応性を調べた。TIA, RIND の脳血流は、健側においても健常者に比し有意に低く、終末呼気 CO_2 濃度との相関は健側、血流低下域ともにきわめて乏しかった。しかし、脳血管抵抗 (CVR) とは有意の負の相関が認められた。一方、脳血流の CO_2 反応性は、健側では健常者に比し有意に低かった。血流低下域では逆に高い場合もあり、特に、血流が低い所ほど大きくばらつき、一定の傾向は認められなかった。

4. Pick 病, Alzheimer 病の SPECT 像

—— ^{133}Xe -rCBF 像との比較を中心に——

虻 眞弘 駒谷 昭夫 高梨 以美
星 俊子 堤 玲子 (山形大・放)

^{123}I -IMP SPECT 像における Pick 病, Alzheimer 病の低集積部位について ^{133}Xe 吸入法 rCBF 像と比較検討した。IMP 像は Xe 像と比べコントラストが低く、IMP 像のカットオフ値を13.7%に設定すれば、健常部の低集積域である白質の灰白質に対する割合が Xe 像と一致、同様のコントラストが得られるので、今回の検討では IMP 像のカットオフ値を13.7%とした。対象は Pick 病6例, Alzheimer 病9例で、装置はリング型 SPECT HEADTOME SET021 を使用した。

Pick 病の半球に対する前頭葉の集積低下の割合は、Xe $83.5 \pm 9.6\%$ 、IMP $83.6 \pm 14.6\%$ で有意差なく相関係